
ループ

てんだー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ループ

【Nコード】
N2522E

【作者名】
てんだー

【あらすじ】
年々増え続ける未成年の異常な犯罪。少年少女の心に潜む闇、大人の心の中の鬱屈。本当の正義とは…

プロローグ

闇 ただの闇 深いか浅いかも無いただの闇
いつもその闇から俺に問いかける声

「正義とはなんだ？罪とはなんだ？」

俺はその問いかけに対する明確な答えは持っていない、仕方なく沈黙で返す。

闇からの声は繰り返し繰り返し俺に問いかける

「正義とはなんだ？罪とはなんだ？」

目覚めたのは午前三時を少し回った所だった。

このところロクに眠っていないかった体が食欲に睡眠を貪った結果がこの時間。 妥当な時間もな…そんな事を考えながら狭いリビングに向かい、冷蔵庫から冷たい水を出し半分程飲みペットボトルに蓋をした。

「お兄ちゃん？」

廊下の方から妹の声

「恵里、悪いな起こしたか？」

「ううん、明日は休みだからテレビ見てただけ…お腹減ってない？」

自慢の妹は母親の様に優しく俺に尋ねた。

「少し…何かあるか？」

「私も少しお腹空いたから何か作るね。」

テレビのリモコンを手に取り電源をつけた。モニターに映し出されたのは、熱心に商品を宣伝する外国人女性。こんな時間では、ろくな番組はやっていない。

「最近忙しそうだね、お兄ちゃんと話すの三日ぶりだよ」

「ん…ああ そうだな、ここの所忙しくてな」
「お兄ちゃんの仕事が忙しいって…なんか嫌だね…」
「そうだな」

昨今、未成年者犯罪が急増し、警視庁は対策部を去年の末に設立。俺はそのメンバーに選ばれ、多忙な日々を送っている。

自分の家で時間を過ごすのは、珍しい事になってきていた。

テーブルに置かれたナポリタン。妹の料理の腕前は大したものだ。俺はもっぱら食べる専門。

皿の上のパスタがなくなり、煙草に火を付けテーブルからソファーに移動する。恵里の皿はまだ半分程残っている。

「ピリリリ」

上着の中で携帯電話がくぐもった音をだす。こんな時間に鳴る電話で吉報など来るはずも無い。

「三上か？」

「はい」

「渋谷で事件だ！今すぐ現場に向かってくれ、詳しい住所は車に送っておいた。」

「わかりました、すぐに向かいます。」

電話を切って初めて視線に気付く、妹が不安げに俺を見つめていた。

「また何かあったの？」

「ああ、まだ詳しい事はわからないが渋谷で事件らしい…」
上着を羽織りながら恵里の問いに答える。

「何かあったらすぐに電話しろよ」

「うん…気を付けてね…」

恵里の顔に 不安の表情が張り付いていた。

車に乗り込みエンジンをかけた。

「ピー」

カーナビが音をたてる。

ウィンドウに映し出されたのは渋谷近辺の地図、続いてウィンドウの中央に

「認証」の文字。俺は文字の下にある四角いマスに親指をあてた。画面の地図の左上辺りに赤点が点滅し、文字列がウィンドウを埋めた。

「井ノ頭道か…」

俺は車をガレージから勢いよく発車させた。

現場辺りは騒然としていた。

警官、報道、野次馬現場中心は、イエローテープで仕切られている。

少女と凶器

俺は人混みをかき分け、現場中心へ歩みを進めた。

「あつ！お疲れ様です！」

俺の姿に最初に気付いた制服警官が、お手本の様な敬礼を見せた。

「お疲れさん」

制服警官は敬礼を解き、イエローテープを持ち上げた。

テープをくぐり抜け視線を上げると、ほぼ同時に俺は名前を呼ばれた。

「三上！！」

声の主は西條 弘。俺はこの人に頭が上がらない。

「お疲れ様です」

「おう、うんざりするな……」

そう言い放った西條さんの横顔は寂しげだった。

少し俺を見やり、また話始めた。

「被害者は坂上 慎治56歳、傘が腹に突き刺さってやがった……」

「傘、ですか？」

「ああ」

「腹部を傘で……相当の力じゃないと……」

俺は言葉に詰まった。

俺の心を見抜いたように、西條さんは言葉を引き継いだ。

「俺も我が目を疑ったよ。長い間この仕事に就いてるがあんなのは見たことも聞いたこともねえよ」

「被疑者は？」

「中山 勤：17歳ここ最近の事件同様その場で命を絶ちやがった」

西條さんの目線の先には、大量の血痕と人型のホワイトテープがあった。

「またですか……」

「これで三人目だ。もう関連性がねえなんて事言えねえよ」

最初の事件は、

「警視庁未成年犯罪者特別対策部」が発足されて間もない頃だった。

1月3日

PM 3:05

豊島区 池袋

「現場から各車へ、区役所裏道りで事件発生。至急急行願います」
三上は無線機のマイクを車内に放り投げ、目の前の惨劇に意識を集中した。

「あう…あつ…ぐつ」初老の男の脇腹にはサバイバルナイフが深々と刺さっていた。

サバイバルナイフを握った少女は、もう片方の手に拳銃を握りしめていた。

遠巻きに野次馬たちが事の成り行きを見守っている。一番近い場所に居るのは三上だった。

「コイツさ…私の事端カネで…ウツつもりだったんだよ。マジウザインだけど」少女は間延びした喋り方でそう語ると、三上の方へゆっくりと視線を向けた。

三上を見つめ、少女また喋り出した。

「マジウザイからさ…このオヤジ、死刑でいいよね…ねっ、刑事さん」

「止める」

とっさに三上の口から言葉が漏れた。

「バンッ」

銃声と共に男は声も無く崩れ落ちた。サバイバルナイフを脇腹に刺したまま。

三上は腰のホルダーから拳銃を抜き出し、少女に銃口を向けた。少女の右手がゆっくりと動く。

「止めるんだ！」

三上は威圧的な声でそれを制止しようとする。

だが右手の動きは止まらない。

「止めるー！！」

「バンッ」

三上の声と共に銃声が、辺りに響いた。

一瞬の静寂

すぐさま女の悲鳴、誰かの嗚咽が三上の聴覚を通り過ぎた。三上は眼前の現実をただ眺めていた。

歪な頭の死体が2体。少女の体が痙攣し、拳銃が

「カタッ」と音を立てた。

「三上さん」

呼び掛けに気付き俺は振り向いた。

「お疲れ様です」

「未特」最年少、徳山 司が、俺に敬礼していた。

「司、被害者はどんな感じよ？」

俺より先に西條さんが司に問い掛けた。

「今病院から連絡を受けました。坂上は一命を取り留めました」

「初めてだな…」

西條はポツリと呟いた。

「ですね」

俺もそれに続いた。

「でも…絶対安静なんで聴取、取れませんよ」

司が当たり前の事を当たり前に言った。

「とりあえず待ちですね」

「だな」

俺とやりとりした西條さんは司の頭を軽く叩いてその場を立ち去った。

「はあ〜」司は考え深げに溜め息をもらした。

「どうした？」

「いや俺考えたんですけど…そんなに簡単に自分の命をすてるもんですかね？」

確かに一連の事件の犯人はなんの躊躇無く自ら命を絶っている。今回はまだ解らないが、前二人に薬物反応は出ていない。自分で自分の頭を撃ち抜くなんて正気の沙汰じゃない。

「あつ」司がなにか思い出した顔を見せた。こんなに考えが、顔に出る奴も珍しい。

「亮が気になる事言ってたんですよ」

「秋野か？」

秋野 亮。渋谷ではちょっとした顔の悪ガキだ。ただ最近の悪ガキにしては珍しく、拗ねても無いし男気もある。自然と人を惹きつける魅力を持っている。

「まだその辺りに居るのか？」

司はさっきまで現場聴取を取っていた。

「いや〜もう時間が時間ですからね〜」

そう司に言われ腕時計に目を落とした。時間は5時を少し過ぎていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2522e/>

ループ

2010年10月12日04時16分発行